

豚の産子数における選抜指標は 総産子数よりも生存産子数のほうが効率的である

一口に産子数といっても、出生時に生存個体のみをカウントする場合や出生後に肺呼吸をした形跡のある個体あるいは黒子までもカウントする場合など様々です。出生後、記録をとる段階で生きている子豚の数を生存産子数、黒子を除く子豚の数を総産子数、総産子数から生存産子数を差し引いたものを死産数と定義したとき、生存産子数を増加させるためには総産子数よりも生存産子数を指標としたほうが、一般に改良効果の高いことを明らかにしました。

☆ 技術の概要

1. 生存産子数による選抜は総産子数の選抜よりも、集団の遺伝的改良量が 10 世代で平均約 0.1 頭上回ることが期待されました。これは、母豚 200 頭規模の農家で、10 年間の累積子豚出荷頭数に換算すると、約 200 頭以上の差になると考えられます。
2. 生存産子数に死産数の情報を加えると、生存産子数のみの選抜よりも僅かながら遺伝的改良量はより大きくなります。
3. 選抜に用いる生存産子数や死産数の推定遺伝率などに偏りのある場合でも、生存産子数の遺伝的改良量は影響を受けません。

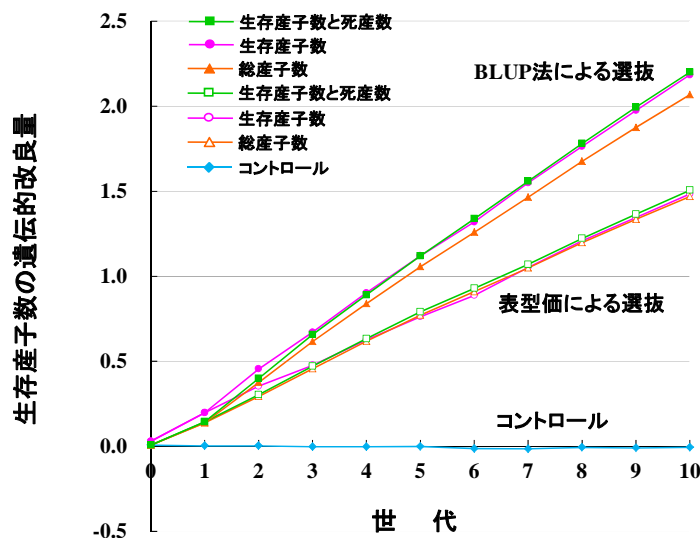


図. 選抜形質および選抜法の違いによる生存産子数の累積遺伝的改良量

☆ 活用面での留意点

1. 本結果は多くの豚育種集団において成り立つと考えられますが、合成品種などの特殊な集団に対しては、その遺伝的パラメーターを推定し、改良効果を検討する必要があります。
 2. 詳細については、畜産草地研究所・情報広報課（電話：029-838-8611、問い合わせフォーム <https://form.affrc.go.jp/nilgs-naro/inquiry/form.html>）にお問合せください。
- （独）農研機構 畜産草地研究所 家畜育種繁殖研究領域 佐藤正寛